

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 11

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 201.オランダ語の習得について:言語空間のフラットランド化に抗って
- 202.各人固有の成長プロセスに応じたテーラーメイドな成長支援の実現に向けて
- 203.徹底的な自己否定の果てに
- 204.今を今刻むその果てにある新しい今
- 205.領域全般型発達測定の実用性
- 206.発達科学と複雑性科学を架橋した功績者ポール・ヴァン・ギアートについて
- 207.“recreation”と“re-creation”
- 208.「なぜ成長・発達しないのか?」:圧倒的な鍛錬の欠落
- 209.バイリンガル教育と知性の発達
- 210.読者の方から寄せられた質問事項(No.9)「構造はどのように生み出されるのか?」
- 211.緩やかに荒々しく静かに
- 212.私の中のファン・ゴッホ:ゴッホ美術館を訪れて
- 213.存在のダイナマイトに火をつけて
- 214.私の中の森有正先生
- 215.発達段階ごとの支援手法について
- 216.未だ名もなき大切なもの
- 217.能力の発達に関する「5つの変容原則」
- 218.成長・発達に不可欠な権威的存在
- 219.母校の思い出と大月康弘先生
- 220.生態系(ecosystem)としての知性発達

---

## 201. オランダ語の習得について:言語空間のフラットランド化に抗って

先日、恩師であるオットー・ラスキーからメールをいただいた。私がオランダに留学しに行くということを告げて以来、メールの最後には必ずオランダ語で書かれたメッセージが残されている。「オランダ語も学びなさい」というラスキーの親心だろうか。

話によると、ラスキー自身も若い頃、7年間ぐらいオランダで生活をしていたそうである。彼は言語に堪能であり、実に多くの言語を操ることができる。

4年前にマサチューセッツ州郊外の自宅にお邪魔させていただいた時、書斎の上に、読み込まれたスペイン語の辞書が置かれていた。80歳を過ぎても旺盛な思索活動を継続させ、多くの言語に親しもうとする姿勢には頭が下がる思いであった。

それに引き換え、私はどうだろうか。今度のフローニンゲン大学でのプログラムはすべて英語で行われ、英語さえできれば正直なところオランダで生活する上で大きな支障はない。今年初旬にオランダを訪問した時にそのようなことを感じた。

実際に、フローニンゲン大学の教授や留学生課の方たちと雑談をしても、取り立ててオランダ語を学ぶ必要はなく、英語が堪能であれば問題ないということを指摘していた。現地語を飲み込んでしまう英語という普遍語は、実に恐ろしいものだと思った。

しかし、オランダ人同士が対面した際には、英語ではなくオランダ語が紛れもなく用いられているということ、現地語はその国の文化の結晶体であるということを考えると、怠惰に英語に依存してばかりいてはならぬと思う。

少し前から、オランダ語のオンラインコースに参加登録をしたが、学習がほとんど進んでいない。当初は、オランダを代表する哲学者スピノザの書籍——特に、フローニンゲンの街の古書店で見かけた“Tractatus de Intellectus Emendatione (邦訳『知性改造論』)”——を原著で読みたいと思っていたが、それほどまでに高度な読解力をオランダ語で身につけていくことに対して、やはり二の足を踏む自分がいる。

---

それでも重い腰を上げて、オランダ語の上達に向けて学習を進めていきたいと思う。こうしたことを考えながら、英語というのはつくづくやっかいな言語だと思った。普遍語としての地位に君臨しているが故に、その影響力が途轍もないのだ。

英語をひとたびある程度のところまで習得してしまうと、他言語の習得に対して怠惰な姿勢を助長するだけではなく、現地語でしか開示しえぬ価値や深さに対して敬意を表することを忘れがちな態度を生み出してしまう。

それはある意味、英語による言語空間のフラットランド化と言えるだろう。オランダ在住中は、そうした英語による言語空間のフラットランド化にも果敢なる戦いを挑む必要がありそうだ。

ラスキーからの何気ないオランダ語でのメッセージから、上記のようなことを考えさせられた。

**【追記】:**その後、少しずつではあるが、オランダ語の学習が軌道に乗り始めている。スピノザの“Tractatus de Intellectus Emendatione”を原著で読むには道のりが険しいが、オランダ語の習得に向けて着実に学習を継続させていこうと思っている。

「オランダ語運搬能力」という一つの能力領域を設定し、その能力がどのようなプロセスを経て発達していくのかを観察していこうと考えている。新たな能力を自己の中で育てていくのは、生命を育てていくことに等しいぐらいの尊さと重さがあると思うのだ。

## 202. 各人固有の成長プロセスに応じたテーラーメイドな成長支援の実現に向けて

これまで複数の記事にまたがって、私が在籍していたマサチューセッツ州のLecticaが創造したユニークな発達測定システム「LAS」について紹介してきた。認知的発達心理学の歴史における約一世紀に渡る研究成果をもとに、いかなる能力領域の発達を測定するための手法としてLASは生み出された。

この手法は一つの共通の物差しとして、特定の発話内容に囚われることなく、一つの能力領域に縛られることもない。つまり、この普遍的な測定手法は、発話内容から独立しており、結果として一つの能力領域のみを重視する「ライン絶対主義(キーガンなどの領域特定型の測定手法が陥りやすい罠)」に陥ることはないのである。

---

LASのような領域全般型の測定手法は非常に価値のあるものだとわかる。例えば、教育を例にとってみると、人間発達の洗練された理論モデルを採用することは、教育実践において極めて重要な役割を果たす。そうした理論モデルを構築するためには、信頼に値する測定手法が必要となる。

しかし、言うは易く行うは難しであり、ほとんどの理論モデルは、発達において視点取得能力が重要であるとか、課題と支援が必要であるとか、極めて一般的な説明を与えることにとどまっているのが現状である。しかしながら、これまで見てきたLASは、そうした単なる一般的な説明を超えて、各人固有の詳細なサイコグラフを作成し、発達の次なるプロセスを可視化することによって、さらなる成長につなげていくことができるのだ。

同様のことが教育のみならず、企業社会の文脈においても当てはまる。人間発達に関する洗練された理論モデルによって、人財開発や人財育成はより効果的に実践されるだろう。欧米の企業社会に活用されてきた既存の発達測定手法の多くは、「あなたは発達段階4のリーダーである」「あなたは発達段階3.6の課長である」という単一のスコアを提示する場合がほとんどである。

しかし、LASを活用したリーダーシップ能力の測定手法は、「リーダーシップという領域において、あなたの問題認識能力は11.4であるが、視点取得能力は10.8であり、共同能力は11.6である」というように、その人が置かれている役職や文脈を加味したより詳細かつ洗練された測定結果を提示することができるのだ。

既存の測定手法は、「段階3.8の課長になるためにもっと内省的になりましょう」というような実に一般的な提案しかできないのに対し、LASを活用したアセスメントでは、特定の能力領域の特徴を勘案し、その人の成長プロセスに応じたテーラーメイドの提案を実現することが可能となる。

さらに、教育や企業社会のみならず、人間発達に関する研究の世界においても、LASは大きな役割を果たすと思っている。領域全般的な測定手法は、多様な能力領域や発達構造の性質をより慎重に特徴付けることが可能になるからである。

例えば、インテグラルコミュニティーではお馴染みの「第二層の意識構造」という曖昧模糊とした言葉をより正確に定義することができる。さらに、第二層の意識構造をより正確に捉えるために、第二層の構造的特性と偶発的に見られる発話内容を的確に区別することも可能になる。

---

---

つまり、高次の意識構造を特徴付けると思われがちな言葉や装いの言語表現に囚われることがなくなり、第二層の意識構造を特徴付ける深層的な意識構造に焦点を当てることが可能になるのだ。

確かにLASは知性や能力の発達測定に多大な貢献を果たすと考えられるが、アセスメントの結果はその人そのものを表すのではなく、特定領域においてその人が発揮することのできるある特定の知性や能力の段階を表しているにすぎない、ということを経験に銘じておく必要がある。

さもなければ、「あの人は発達段階3」というような単なるレッテル貼り(ラベリング)が横行する事態——これは「ライン絶対主義」の最たる例である——になってしまうだろう。

また、LASは言語で表現されたものしか分析対象にできない点も考慮しておく必要がある。ただし、言語表現されたものであればいかなるものでも測定できるという特性上、例えば、法律の文書、新聞、政治声明、経営理念などにおける複雑性や抽象性を測定することも可能になる。

このように個人の知性発達以外にもLASを拡張適用することは十分可能であるが、今のところ、そうした研究はまだ存在していない。現在、LASが最も貢献している領域は、やはり個人の発達測定にあるということは紛れもない事実である。単一ではなく多様な能力領域を測定し、個人の成長曲線に応じた教育的介入を実現するために、米国ではLASが教育分野や企業社会で積極的に活用され始めているのである。

### 203. 徹底的な自己否定の果てに

——成熟するとは、何かを獲得することではなくて、喪失を確認することである——江藤淳

ひどく精神的に過酷な一年だった。同時に、ひどく変容的な一年だった。

日本に帰国中のこの一年間、不必要とも思えるほどの自己否定を敢行している自分がいた。自分でもなぜあれほどまでに、これまでの自分の思想やあり方、思考の枠組みや行動など、自己を構成する諸々のものをぬぐい去ろうとしているのかわからなかった。

---

人間が成長・発達していくためには、現在の自己の限界や未熟さを自覚できる必要がある。つまり、成長・発達には、健全な「自己否定」や「自己葛藤」が不可避となるのだ。これらは、発達心理学で必ず指摘される成長・発達の根幹原理である。

この根幹原理を経験すること。それは、これほどまでに過酷な営みであることに実存的な次元において感得した。人間の成長・発達を探究する者として、いつも驚かされるのが、自分自身が書物に書かれた概念・理論・原理などと予期せぬ形で体当たりする瞬間であり、他者が同様な経験をする瞬間である。

要するに、自分自身の変容する瞬間や他者が変容する瞬間に立ち会うこと、その中にいつも驚嘆と神秘を感じるのだ。

この一年間を振り返ってみると、徹底的な自己否定の果てに、自己の中に大きな空洞ができる感覚があった。しかしながら、空洞が生み出された瞬刻、その空洞を一飲みにしてしまうほどの実存性で満たされた。その瞬間は、まさに連続的なプロセスが途切れ、非連続的な跳躍が起こり、連続性の流れが何事もなかったかのように再び動き出す感じである。

自分の内側で起こっていたこの現象は何を意味するのか。それは、次の段階に参入し始めた兆候なのだ、と事後的にわかった。この6年間、人間の成長や発達に関する諸々の概念や理論を学んできたつもりである。

しかし、地図を理解することと地図を歩くことは、全く別次元の経験である、ということを痛感させられた。骨の髄まで到達する自己否定の先には、“desvolper”があった。“desvolper”とは、「発達 (development)」の語源であるフランス語であり、「拓く」という意味を持つ。

己の内側に閉じ込められていたものが開くような感覚。開拓されていくようなイメージだろうか。

「情熱」を持つ自己を徹底的に否定した挙句、「熱情」を持つ自己が開いた。熱情を持つ自己を徹底的に否定した挙句、「静謐さ」に包まれた自己が開けた。いや、これはもはや自己ではなく、静謐さそのものの中に自己が溶解したような感覚だった。

---

これ以上の先を望んだとしても、あるいは、望まなかったとしても、自然と開いてくるのが発達というものの本質だろう。

惑星が惑星として運動しているあの法則。生命が生命として躍動するあの法則。客観的な記述が可能な次元の法則ではなく、そうした記述を一切寄せ付けない次元に存在する法則。

それらと全く同じような法則が人間の成長・発達にも組み込まれており、私はただその法則を感じている。法則に導かれるままに。

#### 204. 今を今刻むその果てにある新しい今

—人生の究極的な意味は、私たちの理解できる範囲を超えている。けれどもそれは、それを欠いては私たちが生きていくことができなくなるような何かである—ヴィクトール・フランクル

何かを表現するというのは、自分の内側にある何かを開くことである。自分にとって何かを表現する一つの手段が書くことであるならば、書くことは自己の内側の何かを開くことである。

「発達 (development)」の語源は、フランス語の “desvolper” であり、それは「開く (拓く)」という意味を持つ。つまり、発達とは自分の内側に隠れている何かを開いていく営みなのである。

私にとって、「書く」という行為は、自分の内側に隠秘されているものを開いていく営みに他ならないのだと思う。書くことは開くことなのだ。

座禅や瞑想などの実践修行なくして、ひたすらに書くという行為を通じて自己の内面に光を与え続け、悟りの境地に至ったラマナ・マハルシの存在をふと思い出す。「書く」という一つの実践について考えれば考えるほど、書くことの中には神秘的な力が宿っているのかもしれないと思わされる。

また、書き言葉は時空に刻まれるという特徴を持つ。ある人の書き言葉は、時空を超えてまた別のある人へ届くのだ。

ジョン・ロック、イマニュエル・カント、森有正先生の書き言葉に今日触れた。彼らは今日この世にいない。それでも彼らの言葉は紛れもなく私に届いたのだ。



---

一方、話し言葉には一瞬の輝きはあるものの、時空に根を張ることなく、虚空の彼方に消え去ってしまうという特徴がある。書き言葉と話し言葉にはそんな違いがある気がするのだ。

昨日、教育哲学者のパウロ・フレイレの主著“Pedagogy of the Oppressed (1970)”を読んだ。本書の中でフレイレは、真の意味での実践とは行為と内省が結び合わさったものであると述べている。

真の意味での実践を形作る行為と内省の媒介者として、「書く」という営みがあるように私は思う。すなわち、私にとって書くことは、行為と内省の間隙に存在する価値ある営みであり、両者を架橋する貴重な媒介者なのだ。

書くことによって、行為と内省は実践へと昇華され、深く生きることを可能にしてくれるのだ。「書く」ことは、今の私にとってそのような意味を持つらしい。

書くことによって、自らの言葉をこの時空に刻み込む。刻みながら進む。何かを刻印することなしに、私はもはや先に進めなくなっている。

今日も書くことによって今日を刻む。明日も書くことによって明日を刻む。今を今刻むことによって、今を今引き受ける。今を刻むその果てに、これまでとは違った今が開かれる気がするのだ。

## 205. 領域全般型発達測定の実用性

日本の企業社会を眺めてみると、組織における人財育成に真に有用なアセスメントがまだまだ導入されていない、という印象を受ける。

この要因について企業人の観点から考えると、アセスメントというのは「評価のためのものである」という意識が強く、「育成につなげるためのものである」という意識が希薄なことが挙げられるかもしれない。

また、他の要因を発達心理学者の観点から考えると、彼らは発達現象のプロセスやメカニズムの解明のみに光を当てることに留まり、人間の成長・発達に実りと豊かさをもたらす実践をアセスメントと

---

結合させて提供することに踏み込んでいないからだと思う。そのため、人財育成に真に有用なアセスメントがなかなか企業社会に導入されていないのだろう。

ただし、日本の場合は、成人の知性や能力の構造的発達を扱う研究者が皆無に等しいため、単純に人手不足という問題が大きいが……。

今回の記事では、組織における人財育成に真に有用なアセスメントになりうる、Lecticaが提供している「LAS」の実用性について簡単に紹介したい。これまでの記事の確認であるが、LASは領域全般型の測定手法であるという強みを有しているため、広範な能力領域の測定を可能にする。多様な能力領域を一貫して同じ測定手法で評価できることは、実務的に見ても大きな有用性を持つと言えるだろう。

LASは言語で表現されたものしか測定できないという限界を有しながらも、逆に言うと、言語で表現されたものであればどんな能力領域も測定することができるという特徴を持っている。LASは例えば、ある組織内の構成員が保持する多様な能力の成長度合いを測定することもできれば、測定結果に基づいて有益なトレーニングプログラムや学習カリキュラムを組み立てることもできるのだ。

つまり、LASを活用する最大の恩恵は、知性や能力の成長段階を明らかにするだけではなく、知性や能力の成長プロセスを明確にし、そのプロセスに沿った成長支援プログラムを開発することが可能になるということである。

個人と組織のどちらにおいても、普遍的な成長プロセスがありながらも、成長の形と速度は個別的なのだ。そのため、時間と費用の問題を解決する必要があるが、LASのような領域全般型の測定手法を活用しながら、個人と組織の個別性を汲み取ったトレーニングプログラムを構築することができれば一番望ましい。

LASの実用性を語る上で忘れてはならないのが、「サイコグラフ (psychograph)」の作成である。ケン・ウィルバーのインテグラル理論でお馴染みのサイコグラフは、大きく分けると二つの種類が存在する。

---

一つ目は、多様な能力領域における現時点での成長度合いを示す「共時的サイコグラフ」と呼ばれるものだ。「共時的(synchronic)」という名称が示唆するように、このタイプのサイコグラフは、時間軸上のある一点における成長を捉えるスナップショットのようなものである。

それに対して、LASが描くサイコグラフは「通時的(diachronic)」と呼ばれる。通時的サイコグラフは、時間軸上のある一点における成長を捉えるのではなく、成長プロセスが可視化できるように複数の時点における成長を捉えていく。

要するに、共時的サイコグラフでは成長プロセスがわからず、ある特定時点における能力段階を示すことしかできないが、通時的サイコグラフは、ある特定時点における能力段階のみならず成長プロセスも示すことができるということである。

LecticaがFBIやCIAに測定サービスを提供していた時のことを思い出すと、通時的サイコグラフを描くために、LASは下記のようなプロセスで活用されていた。最初に、アセスメント被験者は、幾つかの異なる能力領域に焦点を当てた多面的な測定を受ける。実際のアセスメントでは、オープン形式の質問項目を中心に、各質問項目に対応した能力領域を測定していく。

例えば、「リーダーシップ能力」を測定したい場合、リーダーが職務において直面するであろうジレンマをどのように乗り越えていくのかという「意思決定能力」に焦点を当てた問いを設け、倫理的な課題に直面した時にどのようにそれを乗り越えていくのかという「倫理的推論能力」に焦点を当てた問いを設定していく。

上記のような多様な能力領域を測定するアセスメントを実施後、分析作業が始まる。LASは言語表現を分析していくものであり、特に言語表現で見られる深層構造に焦点を当てているため、その言語表現がどの知性段階から発せられたものなのかを特定することができる。多様な能力領域にLASを適用すると、その領域固有に独自の発達スコアを算出することが可能になる。

各々の能力領域は別々に分析されながらも、分析で用いられるのはLASという一つの共通の物差しであることが肝となる。つまり、一つの共通の物差しで複数の領域を測定できるが故に、多様な能力領域を比較することが可能になるのだ。

---

もし、共時的なサイコグラフを描くことが目的であれば、測定は一回のみで完結する。しかし、もし成長プロセスを明らかにする通時的なサイコグラフが必要であれば、測定を定期的に行う必要がある。

私の経験上、LASは共通の物差しを兼ね備えているおかげで、サイコグラフを効率的に構築することができるという優れた特徴を持っていると考えている。さらに、一つの共通の物差しで多様な能力領域を測定することが可能であるため、多様な能力同士を比較することもできる。つまり、LASによる発達測定は効率的なアセスメントが実現できることに加え、アセスメント結果の解釈も行いやすいというメリットがある。

そして、何よりLASのような領域全般型のアセスメントを活用することによって、多様な能力領域の成長プロセスを把握することができ、成長プロセスに応じたトレーニングプログラムを構築することが可能になるということを強調しておきたい。

#### 206. 発達科学と複雑性科学を架橋した功績者ポール・ヴァン・ギアートについて

ポール・ヴァン・ギアートの紹介動画:[https://youtu.be/yMihQESK2\\_U](https://youtu.be/yMihQESK2_U)

私がフローニンゲン大学に留学することを決定付けた人物、それがポール・ヴァン・ギアートである。ヴァン・ギアートがいなければ、発達科学と複雑性科学の接点に出会うこともなかっただろうし、自分の研究や実践に複雑性科学のアプローチを採用しようとも思わなかっただろう。何より彼がいなければ、幾分日本と離れたオランダという地に渡ろうと決意しなかったと思うのである。

ヴァン・ギアートの最大の功績は、発達科学と複雑性科学を架橋し、複雑性科学の代表的な理論であるダイナミックシステム理論を発達研究に適用する道を切り拓いたことにあるだろう。

また、ヴァン・ギアートは、元ハーバード大学教育大学院教授カート・フィッシャーと並ぶ構造的発達心理学の二大巨頭の一人だと私は思っている。二人の巨頭は、キャリアの終焉まで研究一筋で貫いてきた生粋の発達科学者であり、25年以上にわたって二人は共同研究を行う間柄であった。

---

ヴァン・ギアートの主著“Dynamic Systems of Development (1994)”を見ると、フィッシャーとの出会いのエピソードや共同研究の話が記載されており、それを読むたびに二人の関係性の深さが伺える。

1989年の夏、カート・フィッシャーがレクチャーをするために南ドイツのどこかの都市を訪れた。その時、フィッシャーはヴァン・ギアートが住むオランダに向かった。

ヴァン・ギアートは当時を回顧して、アメリカ人のフィッシャーにとって南ドイツは地球の果てであつただろうし、オランダの片田舎までわざわざ足を運んでくれたことが素直に嬉しかったと述べている。ヴァン・ギアートの自宅で、二人はお互いの関心テーマと研究手法に関する議論に耽ったそうだ。

フロイトとユングが初めて出会った時に、数十時間に及ぶ議論に花が咲いたというのは非常に有名なエピソードであるが、そのエピソードを彷彿させるものがある。結果として、それから数年後、フィッシャーはスタンフォード大学の行動科学研究所で発達科学の最先端研究グループを立ち上げた際に、オランダからヴァン・ギアートを呼び寄せ、ダイナミックシステムモデリングの可能性について共同研究を進めていったそうである。

私にとって最も微笑ましいエピソードは、ヴァン・ギアートの農園にある羊小屋でフィッシャーが一夜を明かしたことだった。ヴァン・ギアートの自宅にゲストルームはなかったのか？確かにフィッシャーは、行動主義心理学の始祖バラス・スキナーに師事をして、ハトの運動感覺的知性の発達に関する博士論文を提出してハーバード大学から博士号を取得しているため、動物好きであり、もしかしたら羊好きなのかもしれないという空想が膨らむ……。

いずれにせよ、二人の関係の深さを示すエピソードには心温まるものがあつた。そんな二大巨頭が発達研究の現場から引退してしまったことは非常に残念である(フィッシャーは2014年に引退し、ヴァン・ギアートは2015年に引退)。

しかし、二人が共同研究で残してきた数々の成果は発達科学の歴史にしっかりと刻まれ、それらは綿々と受け継がれていくものだと思う。実際に、私を含め、フィッシャーやヴァン・ギアートから多大な影響を受けた世界に散らばる若い世代の研究者は、彼らの研究アプローチを伝承し、発達研究をさらに一歩前に進めようと日々精進している。

---

---

フィッシャーが引退する前年に彼の研究室を訪問し、フィッシャーと直接話をする機会が得られたこと。ヴァン・ギアートは現場から引退したとのことであるが、非公式にヴァン・ギアートから直接教えるを受ける機会がフローニンゲン大学で得られるということ。些細なことのように見えるかもしれないが、研究者としての歩みを進める私にとって、それらは非常に重みのある意味を持っている。

ヴァン・ギアートに連絡をすることによって、私の論文アドバイザーを務めてくださることになるサスキア・クネンという研究者を紹介していただいたこと、400年を越す歴史を持つフローニンゲン大学で今年から新設される「タレントディベロップメントと創造性」というプログラムを紹介していただいたことによって、自分の道が新たに開けたと思っている。

ダイナミックシステム理論の数式モデリングを発達科学に活用した研究を推し進める「フローニンゲン学派」を打ち立てたポール・ヴァン・ギアートに多大な感謝の念を持つとともに、オランダの地で彼に会えることを心待ちにしている。

#### 【ポール・ヴァン・ギアートの推薦書籍と推薦論文】

ヴァン・ギアートの主著“Dynamic Systems of Development (1994)”は、PDF形式で公開されている。ダイナミックシステム理論を活用した発達研究とは、どのようなものなのかを掴むのに最適の書籍である。また、数式モデリングを構築するためのエクササイズも豊富にあるため、手を動かしながら書籍の中へと入っていける。[http://www.paulvangeert.nl/publications\\_files/Dynamic%20systems%20of%20development%201994%20b.pdf](http://www.paulvangeert.nl/publications_files/Dynamic%20systems%20of%20development%201994%20b.pdf)

画家でもあるヴァン・ギアートの作品を楽しみながら、その他の論文も読んでみたい方は、彼のウェブサイトを開覧することをお勧めする。<http://www.paulvangeert.nl/>

少し難解かもしれないが、心理学の学術誌の中で最も権威のある「Psychological Review」に掲載された二本の論文が特に輝きを放っている。

1: A dynamic systems model of cognitive and language growth (1991).

2: A dynamic systems model of basic developmental mechanisms: Piaget, Vygotsky, and Beyond (1998).

---

## 207. “recreation”と“re-creation”

—人間の魂は、自己を落ち着いて眺めうる時間の長さだけ豊かになるのかもしれない—辻邦生

東京も梅雨らしくなってきた。雨の日と雨の日の間にある晴れの日がより一層輝きを放っている。

雨の日と晴れの日が分かちがたく結びついた梅雨の季節を愛でることができるようになったのは、ここ最近のことかもしれない。意識の変容は、季節の捉え方も変えてしまう。

近所を散歩中、美しいアジサイを見つけた。逆かもしれない。美しいアジサイが私を見つけた。色とりどりのアジサイの前で立ち止まりながら、立ち止まることの重要性について思いを馳せた。しかし、世間一般の傾向として、立ち止まることはあまり好ましくないと見なされているのではなかろうか。

だが立ち止まって一息入れることは、非常に重要なことだと思うのだ。思うに、レクリエーション(休息)とリクリエーション(再創造)は表裏一体の関係を成す。

人間の発達には、既存の段階が崩壊し、新たな段階が再創造されるプロセスである。再創造の波に乗るためには、休息を挟むことが極めて重要になるのだとこの頃よく感じる。

ある段階から次の段階に到達するためには、膨大なエネルギーが必要となる。成長・発達が進まないのは往々にして、エネルギー不足に主要因がある場合が多い。エネルギーを補填するときに鍵となるのが休息である。

自分自身に眼を向けてみると、私は休息することがそれほど上手くないと思っている。皆さんはどうだろうか？日々の生活に適切な休息があるだろうか。

昨日、ジョン・ロックの“Some Thoughts Concerning Education (1693)”を読んだ。本書の中でロックは、休息とは怠惰さを意味しないということを指摘している。正鵠を射ている。

世間一般的に、「休息」という言葉の中には否定的な意味が入り込みがちであるが、ロックは休息の中に肯定的な意味を見出す。現代人はせわしなく生きすぎているのではないだろうか。より正確には、現代人はせわしなく生かされている、と言ったほうがいいのかもかもしれない。

---

---

ある特定の知性や能力を高めていく際に、確かに膨大な実践量が必要となる。つまり、特定領域の実践に没頭することが成長にとって不可欠なのは間違いない。しかし、没頭するためには休息が必要だと思うのだ。

最近、「没頭(ぼっとう)すること」と「ぼお〜とすること」の境界線を探っている。そこで気付いた。両者の境界線は限りなくゼロに等しいことに。

要するに、日常「ぼお〜と」できない人は、真の意味で何かに「ぼっとう」することなどできないのではないだろうか。没我(我を没入させる)と安我(我を安息させる)は不可分である。そんなことを思うのだ。

「休息」という一見すると静的な行為の中に、自己の生命エネルギーの動的な躍動を感じられないだろうか。自我が安息の境地にある時、私は自己の生気溢れる鼓動を感じる。

慌ただしく営まれる現代社会の日常生活において、ここで一度、立ち止まることの価値を、休むことの価値を見直したいものだ。

## 208. 「なぜ成長・発達しないのか?」: 圧倒的な鍛錬の欠落

—生きた、愛した、書いた—スタンダールの墓碑銘より

澄み渡る朝の静けさの中に小鳥のさえずりを聞いて目覚めた。起床後、すぐに窓を開け、その日の搾りたての空気とエネルギーを全身に注ぎ込む。

電車が無機質かつ暴力的な音を立てながら走り去った。静かな音楽を届けてくれている小鳥たちに謝りたい気持ちだった。自然的な交響曲と人工的な不協和音から今日という一日をスタートさせる。

知性や能力の発達に不可欠なものは何か? それは生得的な要因や後天的な要因を含めて様々なものがあるが、一つ間違いなく重要なものとして、その領域における圧倒的な量の鍛錬が挙げられる。



---

自戒の念を込めて言うと、私は自分の専門領域における過去の鍛錬が非常に手ぬるいものであったと思っているし、現在の鍛錬に関しても質・量ともに改善の余地が大いにあると思っている。毎日、自分の鍛錬の量と質に関して内省し、手探りの状態が常に続いている。

特に、私が最も反省をしているのは、「書く」という行為をこれまで相当疎かにしていたということである。足りないのである。圧倒的に足りていない。そんな欠乏感が日増しに強くなってきている。

私が在籍していたマサチューセッツ州のLecticaという研究機関が興味深い実証結果を提示していたのを思い出した。言語が媒介される能力領域において、その能力を高める最も重要な要因は「高等教育」であることがわかったのだ。

もう少し丁寧に説明すると、企業社会を例にとれば、論理思考や戦略思考と呼ばれる言語と密接に関係した能力を向上させるためには、高等教育が重要になるということである。実際の調査結果では、ある専門領域で高度な能力を獲得していた人は、その専門領域における修士号や博士号を必ず取得していた。

企業社会で要求される能力を高める際に、経営学関連の修士号や博士号を取得する必要があると安直に言うことはできないが、そうした高等教育に準ずる専門的な知的トレーニングを積む必要があると思う。なぜ修士号や博士号を取得した人がその専門領域で高度な能力を獲得できたのかを考えてみると、圧倒的なインプットもさることながら、「書く」という圧倒的なアウトプットがトレーニングの核にあるからだと思う。

Lecticaが実施したこの調査は、米国で修士号や博士号を取得した人を対象にしていた。私は日本の修士課程や博士課程について疎いのであるが、米国の修士課程や博士課程では徹底的に書くという鍛錬に否応なしに従事させられる。

膨大な量のアウトプットを経てきた人が、自らの専門領域で高度な能力を獲得できるというのは頷ける。なぜなら、特定の専門領域である能力を涵養する際には、必ずその領域における「実践」を積み重ねる必要があるからだ。言語を媒介にする知性領域における最良の実践は、「書く」ということなのではないかと思わされる。

---

Lecticaの発達測定モデルは、元ハーバード大学教育大学院教授カート・フィッシャーの「ダイナミックスキル理論」をもとにしているとこれまで紹介してきたが、フィッシャーの理論で言うレベル12に到達するためには、圧倒的な知識量と圧倒的な知識咀嚼実践が不可欠となる。

驚くほど文章を書かない自分に対して反省の念を込めつつ、強く勧めたいのが圧倒的な量の文章を書いていくということである。成長していないことを嘆くビジネスパーソンを頻繁に見聞きするが、それは「書く」という最も根本的な修練が多分に欠如しているからではないかと思う。

自分は勉強していると思う人は、その勉強量が少なく見積もっても数十倍足りていないと想定しておいたほうがいだろうし、何よりも勉強した知識を血肉化させる実践、すなわち「書く」ということを相当怠っているのではないかと思われる。

企業の人財育成の領域において、「内省」の重要性が近年提唱されている。確かに、内省は成長・発達に関して意義のある実践だと思う。しかし、頭の中で単発的に行われる内省など、真の意味での内省ではないと思うのだ。それはどこか、夢の中で流れる雲を純朴に見つめることに等しいように思われる。

そのような実践で成長できるほど、人間の成長は甘いものではない。頭の中での単なる振り返りではダメなのである。書くことを通じて、知識や経験を自らに刻み込んでいくことが必要になると思うのだ。知識や経験を自らに刻み込み、それらを引き受けられる人にしか成長は訪れないのかもしれない。

企業に発達支援コーチングを提供させていただく際には、必ずクライアントの方に「書く」ことを通じた内省を奨励している(実際は、「内省レポート」という形で強制的に文章を書いてもらっている)。「書く」ことを他者に推奨しているため、自分も書くことを継続させていく必要があると強く感じている。

**【追記】**:私が敬意を表している偉大な知性を持つ巨人たちは皆、圧倒的な量の文章を書いている。私に多大な影響を与えてくれた巨人達の中で、書くという修行を行っていなかった者は一人もいないと思う。己の手と頭を動かして書くという実践行には、知性を練磨させる特殊な何かが潜んでいると思うのだ。

「発達理論ゼミナール実践編」の受講生とのやり取りの中で、言語と発達に関する論点が挙げられたことがある。特に、バイリンガル教育を安易に推し進める昨今の風潮に対する話題であった。

どんな言葉をどんなレベルで運搬できるかは、認知的発達と密接な関係を持っている。言語は精神生活の大きな拠り所であり、私たちは言語を頼りに意味を構築して自分という存在を規定している。そのような性質上、母国語をしっかりと習得することなしに他言語を学び、言語能力が不安定な場合、それはそのまま精神生活の拠り所を失うことにもなりかねない。

こうしたことを考えると、安易にバイリンガル教育を推し進めるべきではなく、強固な母国語運搬能力を涵養することがやはり先決のような気がしている。ただ皮肉にも、発達測定をしていて思うのが、母国語一つの運搬能力を鍛錬することさえもいかに難しいかということである。

本来、言語の運搬能力の高まりと意味を構築する力は連動しており、それはすなわち、言語の運搬能力の高度化は内面的な成熟と密接に結びついていることを意味する。これは、己の言葉を鍛えることなしに、己の内面を鍛えることなどできないことに気づかせてくれる。

母国語一つとってみても、その運搬能力を確固としたものにするのが困難であるにもかかわらず、「日本人は英語を話す能力が欠けているから、読み書き能力よりも話す能力を真っ先に鍛えましょう」という風潮が広まることは極めて危険だと思っている。

こうした風潮には、日本語の鍛錬よりも英語の鍛錬を優先させようとする危険性と、書き言葉の鍛錬よりも話し言葉の鍛錬を優先させようとする危険性が同時に内包されている。ここにはさらに上記で指摘した、精神生活の確固たる拠り所を持つことができない可能性を生み出すという臨床心理学的な観点からの危険性と、内面的な成熟を阻む可能性を生み出すという発達心理学的な観点からの危険性も並行存在している。

確かに私がアメリカに留学した時、自分の英語を話す能力の欠如に愕然とし、英語独特の音を発音するために舌の筋肉を鍛えることから始めたが、結局のところ、英語空間での精神生活を屈強に支えるのは話し言葉というよりも、書き言葉の質に左右されると気付いた。そのため、個人的には徹

---

底的に読み・書きの力を鍛錬することが英語教育における最優先事項だと思うのだ——もちろん、日本の学校教育で展開されている既存の読み書き訓練の方法は完全に形骸化しているため、見直しが必要とされている状況にあることは確かだろう。

しかし言うまでもなく、英語での読み書きの力を鍛えるためには、そもそも母国語での読み書きの力が十分になければならない。そして、母国語での読み書きの鍛錬は学校教育で完結するものではなく、一生涯人間が成長を遂げていくためには、一生をかけて取り組むべき一大事業だと思っている。

金銭を獲得するという小事業に躍起になる前に、人生におけるこうした重大な事業を適切に認識しておく必要があると思うのだ。

この一年間、私は日本語への渴きを癒すかのごとく、貪るように和書を読んだ。それによって、自分がいかに日本語を知らないかに気づいたし、自分の日本語運搬能力に関しても改善の余地が無限に残されていることを発見したのだ。この無限の改善の余地がまさに、終わりなき精神的成熟の指標であるかのように思った。

日本語の運搬能力をしっかりと高めることをせず、骨と肉の無い英語をネイティブ並みに発音できる国民が大量生産される状況になれば、それは日本の知的基盤を溶解させるばかりか、下手をすれば政治的にも経済的にも英語圏の属国になってしまうという危惧がある。そして、それは水面下で、あるいはすでに姿を露わにしながらか進行している気がするのだ……。

## 210. 読者の方から寄せられた質問事項(No.9)「構造はどのように生み出されるのか？」

東京は本日も雨ですね。皆さんのお住いの地域の天気はいかがでしょう。一日たりとも同じ雨の日はなく、一滴たりとも同じ雨滴がないというのは不思議ですね。こうした不思議さに畏敬の念を覚えながら、是非とも今日の雨を「味雨」したいものです。

今回の記事は、拙書『なぜ部下とうまくいかないのか:「自他変革」の発達心理学』の読者の方から頂いた質問に対する応答です。今回のご質問はなかなか手強いものでありながらも、発達という現象を深く理解するために非常に重要なトピックだと思います。

---

**質問:**ポストモダニズムの主要な論点の一つは、「構造がどのように生み出されるのか？」であると思いますが、この点に関して、構造主義発達心理学は何らかの知見を持ち合わせているのでしょうか。

**回答:**「構造がどのように生み出されるのか？」という質問は、「次元がどのように生み出されるのか？」と同じぐらいの難問であり、これまでの発達理論ゼミナールの中でもお目にかかったことのない質問です。構造主義的発達心理学において「構造」と呼ばれるものは、「意識段階」や「知性段階」という概念と対応しており、それらは内面宇宙(心理空間)における次元のようなものだと私は捉えています。

「構造がどのように生み出されるのか？」という問いに真っ向から回答しようとするとは非常に難しいので、構造主義的発達心理学において、「構造」がどのような特性を持つものだと想定されているのかを俯瞰し、そこから構造の創出メカニズムに迫ってみたいと思います。

構造主義的発達心理学の変遷を辿ると、ピアジェ派、新ピアジェ派、新・新ピアジェ派(第三世代)という三つの潮流があり、それぞれ構造の捉え方が異なります。ピアジェ派は、ピアジェが提唱したように、意識段階を固定的なものとして捉えていました。つまり、ひとたび構造が構築されると後戻りできず、構造は決められたプロセスを経て次の構造へ至ると考えられていました。

しかし、元ハーバード大学教育大学院教授カート・フィッシャーやロバート・キーガンを始めとした新ピアジェ派は、構造を固定的なものではなく、変動的なものとしてみなしています。これは現在でも通用する考え方です。要するに、ひとたび構造が構築されたとしても退行現象が生じたり、一つの決まりきった道ではなく、多様なプロセスを経て次の段階に至るという考え方が広く受け入れられつつある、という現状があります。

新・新ピアジェ派(第三世代)は、複雑性の科学を発達研究に取り入れ始めた学派であり、彼らは人間の発達をより動的かつ複雑なものとしてみなしています。ケン・ウィルバーのインテグラル理論で指摘されているように、内的宇宙と外的宇宙は互いに別の領域でありながらも、相互作用をすることによって共存していると言えます。

---

思うに、内的宇宙における構造は、外的宇宙における構造に応じて立ち現れると捉えています。つまり、私たちが置かれている文脈や与えられるタスクには固有の構造特性(次元)が内包されており、私たちがそれらと接触した瞬間に、内的宇宙に構造特性(次元)が発露すると考えています。

非常にわかりにくいので簡単に説明すると、新・新ピアジェ派(第三世代)においては、私たちは一つの固定的な構造を通じて生きているのではなく、置かれている文脈や環境によって千変万化する無数の構造を通じて生きていると考えています。そのため、キーガンの段階モデルだけを頼りに、「あの人は発達段階4」とレッテル貼りをすることはほとんど無意味だと言えます。

私たちは、少なくとも数十個の発達領域を抱えながら生きており、しかも、それらの領域における発達レベルは刻一刻と変化するリアリティの中で激しく変動します。こうした認識は、この現実世界における様々な現象は相互に影響を与え合いながら無限に重なり合っている、という華嚴思想の考え方に近いかもしれません。

上記の考え方を基にすると、「構造」というものは、そもそも内的宇宙にも外的宇宙にも常に偏在しており、構造主義的発達心理学は、構造がどのように生み出されるのかという問いに直接答えることはできず、すでに生み出されている構造のうち、発達心理学の枠組みで可視化可能なものを構造と定義することしかできないのではないかと考えています。

つまり、構造主義的発達心理学は、無限の階層を持つ出来合いの建物に対して、「ここからここまでは2階と3階、ここからここまでは3階と4階」というように、建物を非連続的な階層に区分けしていきます。建物というのは本来単純に階層を区切ることはできず—実際に2.5階部分や2.49階部分が存在する—、連続的な構築物ですが、整数階には紛れもなく人間が活動できる空間が存在するというのを私たちは可視化することができ、そうした事実を持ってして「構造」と切り分けているのに過ぎないと考えています。

端的に言うと、構造は発達心理学者が様々な測定手法を使うことによって可視化されるものだと考えています。ウィルバーが指摘するように、このリアリティは上にも下にも無限のホロン階層を持っており、発達心理学者は、連続的な発達現象の中に非連続的なホロン階層を見出すことを行っている

---

るのだと思います。実際に、キーガンは発達段階2から発達段階5の間に16個の構造を見出しており、これはその一例です。

意識の発達に限定して述べると、私たちの意識はある規則性に則って絶えず運動をしており、その運動プロセスは不規則な動きを見せますが—私たちの意識はある規則性に則って不規則な運動を行うというのは、複雑性の科学に影響を受けている新・新ピアジェ派の発見事項です—、そうした不規則な揺らぎの中で刻まれた道が構造として発達心理学者の目に可視化されるのだと考えています。

長くなってしまいましたが、結論としては、意識段階や知性段階といった構造は、私たちが絶えず外的宇宙と相互作用を行い、ある規則性を持って不規則に運動するプロセスの中で把握可能なものとして浮き上がってきたものだと捉えています。そのようにして生み出された道を発達心理学者は「構造」として定義しているのだと思います。

ここ最近ようやく、「私たちのリアリティはホロンである」という本当の意味を理解し始めている気がします。まさに、私たちのリアリティはホロンに他ならず、構造に他ならないのです。ですが、その構造は微分のように、無限に小さく切り刻むことができってしまうような性質を内在的に持っています。

そうしたことを考えてみると、「構造はどのように生み出されているのか？」という問いは、「リアリティはどのように生み出されているのか？」と同義であると感じた次第です。発達心理学者はそうした形而上学的な問いを真っ向から取り扱うことはできず、彼らが行っているのは、すでに顕現されたリアリティの中から構造を見出していく作業だと言えそうです。

今回いただいた問いについてあれこれ考えていると、「神秘とは、世界がいかにあるかではなく、世界があるというそのことである」というヴァイトゲンシュタインの言葉をふと思い出しました。この言葉を上記の内容を踏まえて発達理論の観点から再解釈すると、「意識発達に潜む神秘とは、ホロン(階層構造)がいかにあるかではなく、ホロンがあるというそのことである」と思わされました。

**【質問者の方からの応答】**

---

この問いについては私もかなりヘビーだなと思っていて、見通しすら立たない状態でしたが、ご回答いただき、当初の問題意識とは別の視点に導いていただいたように感じております。いや、無数の「曖昧なもの」が私を取り巻く世界へといざなわれて、さらに混乱をきたしはじめたということもできるかもしれませんが、問題が問題だけに、混沌の中に投げ込まれるのは必然的であろうという気もいたします。

前言と矛盾しているようですが、問いに対する頂いた回答は非常に解りやすく、特に不明な点などはございません。この問いはいかに難しい問題であるかということ、加藤さんが理路整然と的確に説明してくださったので、「構造の生成」については簡単には論じられないということ、それはなぜなのかということ、そして、その代わりに何を語りうるのか、ということがよく理解できました。

「構造の生成」の問題は、おっしゃるように、つまるところ「リアリティの生成」と繋がっているところか同義である、ということも納得がいききました。そして、自分が恐ろしい質問を平然とかつ漠然と投げかけていたことにも気づかされ、恐縮いたしました。

「意識発達に潜む神秘とは、ホロン(階層構造)がいかにあるかではなく、ホロンがあるというそのことである」というご指摘も、まさしくその通りだと思いました。いや、私の場合は神秘に震撼するよりも、呆然自失の体で立ち尽くしている感じかもしれませんが……。そういったわけで、なかなか加藤さんにお返りする言葉も見つからない状態でした。

しかしながら、今回のやり取りを通して、「構造とは何か」という論点については、かなり理解を深められたと思っています。ありがとうございます。

考えがうまくまとまらないので、応答というほどのものではなくほとんど独白であり、しかも稚拙な表現になってしまい申し訳ないのですが、敢えて正否にも無頓着に所感を記します。ことこの論点に関しては、一見取るに足らないと思える感想にも、何らかの意義が隠されているかもしれませんので。

まず、すくなくとも私は月並みに、もっぱら構造がわれわれの認識を規定しているというように考えていたのですが、にもかかわらず、その規定要因である構造を対象化して分析することができるという謎に、目も眩むような感じがしました……。



---

そうですね、表現をすこし変えれば、構造が主体を規定しているにもかかわらず、主体(の問題意識)がある意味主観的にリアリティから構造を切り分けているようにも見える、という不思議に驚かされたということでしょうか……。規定するものを規定されるものが規定しているという、ややこしい構図ですが、太極図のように、規定作用の主体と客体が互いに入り組んでいるというイメージが頭に浮かびます。

であれば、実のところ、「主体は構造にやられっぱなし(現代の思想・哲学の流れをふまえた比喩的表現)」というわけではなく、「構造が主体を規定すると同時に、主体が構造を(に)切り分けることで構造を規定するという双方向的な作用が存在する」のではないか、とも考えてしまいます。言い古された感のある「構造が主体を規定する」という常套句にも、どこか言葉が足りないところがあるのではないか、というようにも思われました。

もっとも、構造を切り取る主体もまた構造に埋め込まれており、その切り取り方にも相同性が看取される、ということなのかもしれませんが、なんだかわけが分からなくなってきました……。

「そこで密かに発見されることを待っている静態的・純客観的な構築物としての構造」という私の構造に関するイメージが間違っていたのであって、「構造は切り分けられることで初めて構造と化す」ということなのかもしれません。だとすれば、構造の切り分け・抽出は目的論的態度や志向性から必ずしも自由ではなく、やはりそこには「当為(規範)への意志」が見え隠れしているようにも思われます。

構造を切り分ける当のわれわれもまた構造に埋め込まれた存在であり、その構造に特有の道具(色眼鏡やナイフ)でもってして世界を眺め構造を切り分ける作業に従事しているのなら、その抽出作業によって暴き出される事実は真であるという以上に善美の事柄に近いのではないか、とも思われるのです。

また、構造が主体の作用(切り分けるという行為)を受ける対象であって、また微分可能な対象であるのならば、しまいには微分が構造を崩壊させてしまうのではないか、つまり、構造を徹底的に微分することで結局構造は寸断され、その網目を破って多分に主体的な主体が生成するのではないか、などとも漠然と考えました。

---

ホロンが無限に細分化して構造体としての形態を失い、構造に捕えられていると思っていた人間が  
わらわらと脱走しはじめる、いうイメージでしょうか……。このイメージもまた、「主体が構造を(に)切  
り分けることで構造に作用を及ぼしている」という事態の反映です。こうなると構造はもはや構造で  
はないようにも思われ、掴みかけていた私なりの「構造像」もかなり怪しくなってきました。

そもそも認識問題には、主体と客体がメビウスの輪の内で結び合わされているとたとえられるような  
ところがあって、私には非常に難しい問題であるように思われます。同じように、発達理論にも認識  
が認識に——あるいは、主観が(共同)主観に、でしょうか——気づくようなところ、もしくは色眼鏡  
をかけて色眼鏡の分析・研究をしているようにも思われるところがあって(これは学問一般の宿命で  
しょうが)、それが成人の発達が一筋縄ではいかないことの一因であるようにも思われます。

構造についての理解を深めたことは確かなのですが、何かまた新しい問題意識が生まれつつある  
ようです。

とりとめもなく書き連ねてしまったので、以下ポイントとなる箇所を抜き出しておきます(とりわけ3は  
直感的で論理性に欠けます)。

1. 構造が主体を規定すると同時に、主体が構造を(に)切り分けることで構造を規定するという双方  
向的な作用が存在するのではないか。
2. 構造の切り分け・抽出は目的論的態度や志向性から必ずしも自由ではなく、やはりそこには「当  
為(規範)への意志」が見え隠れしているようにも思われる。
3. 構造を徹底的に微分することで結局構造は寸断され、その網目を破って多分に主体的な主体  
が生成するのではないか。

### 【私の応答】

ご返信いただいた回答を何度も唸りながら拝読させていただきました。お送りいただいた3つの論  
点は、私の思考の範疇を凌駕していると理解していますが、それらについて私なりの所感を記させ  
ていただければと思います。

---

1)について:「構造は主体を規定するのと同時に、主体が構造を(に)切り分けることで構造を規定するという双方向的な作用が存在するのではないか」とご指摘いただき、青天の霹靂のような認識に誘われました……。例として挙げていただいた太極図は、主体と構造の密接不可分性・相互依存性を表現する非常に的確なシンボルですね。

もし仮に、「構造が主体を規定するのみであり、主体は構造を切り分けず、構造を規定することはない」という反命題のようなものを設定してみると、やはりおかしいことが起きます。この反命題においては、本来、「認識主体」という能動的な働きを持つはずの主体が、構造によって単純に規定されてしまうだけであるという、実に受動的な存在に貶められてしまうこととなります。

井筒俊彦氏が指摘するように、私たちの意識(特に言語を司る意識)は、「分節化作用」を持っており、この作用によって、混沌としたリアリティから意味を切り取って(汲み取って)独自の意味世界を構築していきます。もし私たちが、分節化作用という能動的な力を持っていなければ、渾然一体としたリアリティの渦に飲み込まれ、私たちは意味的存在——意味を構築し、意味を保持する存在——としてもはや存在できなくなるのではないかと思います。

そのため、主体としての私たちの意識は、積極果敢にリアリティを切り分ける——ひいては構造を切り分ける——という特性を不可避に持ち合わせていると言えそうです。そう考えると、主体と構造の相互作用を無視した上記の反命題のようなものは、意識を持つ主体の根本的な特性を無視しているという点において、大きな誤りがあると思います。

それゆえに、この反命題は棄却され、「構造は主体を規定するのと同時に、主体が構造を(に)切り分けることで構造を規定するという双方向的な作用が存在する」という命題の信憑性は疑うことができないうのではないかという考えに至っています。

そして、これまでの説明は2の論点にも関係しているように思われます。というのも、私たちの意識が持っている、この積極果敢かつ能動的な意味生成力こそが、目的論的態度や志向性の源泉なのではないかと思うからです。

---

意味の中に目的論的態度や志向性が内包されていなければ、私たちの存在が安住できる意味世界が構築されないのではないかと思います。つまり、意味と志向性は、密接不可分のようなものではないかということです。

しかも、この意味生成力は、「当為への意志」に立脚して初めて存在しうるものであり、単に乱雑な意味を生成しているのではなく、そこで生成される意味はまさに独自の規則性・規範性を内に抱え込んだものになるのではないかと思います。

こうなってくると、私たちの存在はもはや、意味を生み出す意味の凝縮体であり、意味に志向性や当為への意志が不可分に付きまとうのであれば、私たちの存在は志向性や当為への意志に他ならないのではないか、という存在者の究極的な側面が見えてきました。

3について、これは実に興味深いご意見ですね。一点ほど、私の説明が不足しており、申し訳ございませんでした。確かに、リアリティはホロンで構成されており、ホロンを無限に微分的に切り刻んでいくことができると思うのですが、ホロン構造の中には微分不可能な結晶体のようなものが同時に存在しているようにも思うのです。

無限に微分することができると言っておきながら、微分が及ばない対象物が存在しているというのは、どこか矛盾しているように自分でも思います。しかし、この微分不可能な結晶体こそ、そのホロンを存在たらしめているものだと思うのです。

例えば、「私とは何者か？」という問いを立て、それについて答えようとするとき、「私は男性である」「私は学者である」「私は30歳である」というように、「～である」という表現で自分という存在を定義していく方向性があるのと同時に、「私はアメリカ人ではない」「私は子供ではない」「私は運転免許書を持っていない」というように、「～でない」という表現で定義づける方向性も存在しています。どちらのアプローチも、私の中では微分するというイメージに近いです。

しかしながら、「私は～である」「私は～でない」という微分的なアプローチを無限に繰り返したとしても、結局、私の存在の核たるものを定義することはできないように思うのです。仮に、存在者の核たるものを「本質(=魂=内在神=仏性)」と名付けるならば、やはりそれは、微分の及ばないものではないかと思うのです。

---

---

存在者の本質を数学における「点」のようなものとみなすと、点は縦と横を保持していないため面積を持ちませんが—数学的な意味において、微分は曲線上の点に対して実行されるものであるため、存在者の本質(=点)は「積分できない」と表現した方が正確なのかもしれません—、面積がゼロにも関わらず存在しているものとみなされる不思議な存在です。

そして、構造も一つの存在者とみなすと、構造にも微分不可能(≡積分不可能)な極地が存在し、それが構造の本質なのではないかと思います。ここに、構造が構造として存在する立脚点が存在することになり、この立脚点と主体たる私たちの本質(=点)が折り重なるところに、構造と私たちが同時に顕現するのではないか、という考えに至っています。

結局のところ、この考え方は、構造と主体の双方の存在性を擁護したい(全ての存在者を崩壊・消滅から擁護したい)という私の個人的な思いの表れに他ならないのかもしれませんが。

## 211. 緩やかに荒々しく静かに

ここ最近の自分の感情を的確に表現するのは実に難しい。とても複雑に入り組んだ塊のようなものが、内側で現れては消え、消えては現れるという状況にある。そっとしておけばいいのかもしれないが、そっとしておいてはいけない気がしている。

なぜなら、この塊の深奥に何か大切なものが眠っているような気がするからである。群衆のような概念の茂みをかき分け、茂みの先にある自分の観念すらを取り払った先には、何か純粋な感覚がそこにある気がするのだ。

この純粋なものに少し近づいてみると、自分の内側で静謐なものが緩やかに流れ続けているのがわかる。今の私にとって、この感覚は大きな安心感を自分にもたらしてくれている。

これまでの自分はどこか重たい鎧を身にまとって生きていたような気がする。重たい鎧を身にまといながら、何かに駆り立てられながら前進していく姿がまぶたに浮かぶ。

---

重たい鎧が自己を取り巻きながらも、物理的な肉体を持つ私の生活拠点は、過去10年間実に流動的に移り変わっていった。目まぐるしく移り変わる生活拠点と重たい鎧について考えを巡らせてみると、あることに気づいた。

私たち人間は、どこかに根を張りたいという基本的な欲求を持つものだ。物理的・精神的な根を張り、安心感を得ることは、健全な肉体と精神を保つために重要だと思うのだ。

しかしながら、私は根を張るということに関して、チグハグな経験に苛まれてきた。どこかに根を張りたいという人間の根源的な欲求がありながらも、生活拠点が点々としている自分にくさびを打つために重たい鎧が生み出されたのではないか、そんなことを思った。

根を張りたいという根源的な欲求の深層に安心感があるならば、精神に安心感が得られた時、この重たい鎧が消え去るのではないか。この一年間、あるボディワーカーの方とセッションを積み重ねていったことによって、まさにこの重たい鎧が変容しつつあるのを実感している。

自己の内側で流れる静謐さに安らぎ、すべてのものが静謐さに溶け込んでいくような身体感覚である。これは一種の状態ではなく、自己の永続的な特性になりつつあることも感じている。

一見すると、今の私も何かに駆り立てられながら前進しているように見えるかもしれないが、そこにはあの重たい鎧を身にまとった重々しい姿はもはやないのである。むしろ、今の私は紆余曲折する大河の流れに乗って、時に荒々しく、時に静かに流れていく大河の上の落ち葉のような存在なのかもしれない。

この表現もまだ腑に落ちない。大河の上の落ち葉も紛れもなく私であるが、その大河そのものも私であると思うのだ。静謐さは、大河の深層部分に存在している「流れることを知らない流れ」であり、まさにそれが自分なのだと気づいた時、諸々の執着から解放されつつある自分がいることに気づいた。

この感覚は、これからオランダを含め、世界の様々な拠点で生活を送る際に自分を根底から支え続けてくれる「自分」なのだと思う。

---

## 212. 私の中のファン・ゴッホ:ゴッホ美術館を訪れて

—偉業は一時的な衝動でなされるものではなく、小さなことの積み重ねによって成し遂げられるのだ—ファン・ゴッホ

ゴッホが残した名作の一つ「ひまわり」が象徴する夏の季節までもう少し時間がかかるようだ。今のよ  
うな梅雨の時期は、「ひまわり」が恋しくなる季節と言えるかもしれない。

今年の初旬にアムステルダムを訪れた際に、私はゴッホ美術館に足を運んだ。アムステルダム駅から道に迷いながらも、アムステルダムの街並みを堪能しながらそこへ向かったことが記憶に新しい。アムステルダムの前に訪れた英国ケンブリッジとはまた違うヨーロッパの姿がこの街にあった。

目的とするゴッホ美術館に隣接する形で、アムステルダム国立美術館が建立されており、その他にも多くの美術館を擁するアムステルダムは芸術の街だと改めて感じていたのを思い出す。

ゴッホ美術館には、ゴッホが残した作品の数々が所蔵されているだけではなく、関連資料も豊富に所蔵されている。そのため、ゴッホ好きにはうってつけの美術館だと言える。

しかし、正直なところ、私はゴッホの作品に感銘を受けたことはほとんどない。ゴッホはポスト印象派の代表的な偉大な画家であることは間違いないが、私は印象派の絵画よりも、極度に抽象的な絵画を好む傾向にある。

そのため、ゴッホは私にとってそれほど近い存在ではなかったのだ。だが、この美術館を訪れ、ゴッホについて知れば知るほど、自分の中にゴッホを見出したような感覚に囚われたのだ。

展示されている作品を眺めているだけでは分からなかったゴッホの姿が、所蔵されている関連資料に目を通していくことによって徐々に浮き彫りになっていったのだ。端的に述べると、ゴッホが挫折に次ぐ挫折の連続の中、それでも絵画作品を描き続けたことに感銘を受けたのだ。

---

壮絶な人生の中で、絵画作品を世に創出し続けたその姿勢を目の当たりにした時、私の中で激震が走った。当時の私は、自分の専門領域をさらに拡張させ、新しい領域に足を踏み入れようとしていたところだった。

ゴッホが本格的に絵画のトレーニングを開始したのは20代の後半であり、そこから37歳という短い生涯を閉じるまで、膨大な作品を生み出していったことに対して大いに励まされたのだ。

絵画に関する伝統的な教育を全く受けずに、ゴッホは独力で自分の道を切り開いていった。ゴッホの鍛錬の仕方と量は、自分が理想とするようなあり方を体現しているように思われた。

この美術館を訪れるまでは、ゴッホは私にとって遠い存在であった。しかしながら、この美術館を訪れたことによって、あるいはゴッホの生き様と真摯に向き合うことによって、ゴッホはもはや私にとって近い存在となったのだ。

いつも思うことがある。未知な場所を訪れ、未知な人と出会うことによって、自分という存在はその場所に他ならず、その人に他ならないということに気づかされるのだ。

アムステルダムを訪れることによって、自分の内側にアムステルダムを見出したし、ゴッホと真剣に向き合うことでゴッホを自分の内側に見出した。「私」という存在の境界線は、ここ数年間ひどく揺らいでおり、境界線なるものは実線ではなく点線になりつつあるのだろうか……。

私がアムステルダムでありゴッホである、同時にアムステルダムとゴッホは私でもある、という不思議な感覚に包まれたことを今ありありと思い出す。

### 213. 存在のダイナマイトに火をつけて

面白いもので、毎日やって来る朝はいつも質的に異なったものとして感じられる。例えば、今朝の起床直後は何やら重たいものが全身にまとわりついているような感じでありながらも、それは不快な重さではなかった。



---

重力のようなどこか心地よい負荷と自分に安定感をもたらすような重さだった。毎朝欠かさずに行っている一連の実践を終えると、そうした重さはどこかに消え、昨日と同じような流れの中に入る。

「向かってはならぬものに自分は向かいつつあるのではないだろうか？」とここ最近毎日のように思う。そこにひとたび足を踏み入れると、戻ってこれないただならぬ何ものかに向かいつつあるのを実感している。

ヨーロッパなる摺みどころのないものに自己を投げ入れる日まで残すところ一ヶ月ほどである。ヨーロッパという存在はそれとして大きなものであるが、自分が向かいつつある常軌を逸したその何かは、ヨーロッパという存在とは異なる気がしている。

昨夜、自分の中で何かが発火したのを感じた。自分の中の何かが発火し、弾け散ったのだ。これは確かだった。

正直に打ち明けると、「人間の発達とは死と再生のプロセス」という言葉にこれまで違和感を覚えていた。より正確には、その言葉に欠けている強烈な何かが発達プロセスの中にあると常々思っていたのだ。

確かに、「死と再生」という言葉にも十二分な重みがある。だがそこには何か重要なものが欠落している、という悶々とした思いにこれまで包まれていた。

しかし、昨夜の体験を経ることによって、その欠落したものが何であるかが分かった。人間の発達において安楽死はありえない。そして、穏やかな誕生もありえないということだった。

あり得ることは二つしかなかった。爆発して死ぬということ。そして、爆発から生まれ変わるということ。人間の発達の根底にあるのは、爆発的な死と爆発的な再生なのではなかろうかと気づいたのだ。

「今よりも成長したいんです」「より成長することを日々希求しています」と言う人やそう思う人に対して、私はいつも安堵感を覚える。なぜなら、それらの人は確実に成長しないからだ。確実に。

---

それらの人が成長に伴うあの爆発的な死と爆発的な再生を経験しないで済むことに対して、私は胸を撫でおろすのだ。単なる言葉や思いから成長を望む者に成長を授けないというのは、成長を司る創造主の極めて優しい配慮だと思う。

真の意味での成長が起こるのは、人知を超えた何ものかに取り憑かれ、自分の内側でのたうち回る蠢めく何かに対して、藁にもすがる想いで祈りにも似たコトバを内側から発する時なのではないかと思うのだ。自分の内側からそうしたコトバが出ざるを得ない極限に至った時、人は遅かれ早かれ確実に成長する。確実に。

「今よりも成長したいんです」という言葉は、成長を創造する人知を超えた存在を召喚しない。それはあまりにも召喚力のない言葉なのである。

一方、藁にもすがる想いから生まれた祈りのコトバは、存在のダイナマイトの導火線に火をつける。ひとたび導火線に火がつけば、いずれや成長という爆発的な事件と必ず遭遇する。

そんなことを思うのだ。

#### 214. 私の中の森有正先生

この一年間の日本滞在期間において、様々な人たちとの出会いがあったように思う。この限られた生命時間の中で、同じ場所と同じ時間を共有することができるというのは、やはり何か特別な意味があるのではないかと思わされる。

そうした意味において、人との縁というのは人知を超えた働きによってもたらされるものだと思うのだ。昨年のお会いの中でも、あえて故人に限定するならば、フランス文学者かつ哲学者である森有正先生(1911-1976)との出会いは格別のものであった。森先生の著作を読んだ時、いや、先生の思想に触れた瞬間、衝撃のあまりに涙が溢れてきた。

溢れてくる涙をそっと拭おうとしたが、優しく拭えるほどの涙では全くなかった。悲しみの感情はそこになかったのだが、それは慟哭に近い涙だった。

---

これほどまでに思索を通じて真摯に生き抜いた人に私は出会ったことがなかった。39歳の時、パリという異国の地で生活を始めてから、その地で客死するまでの26年間、「孤独」と「絶望」を排除することなく、それらを突き詰め、孤独と絶望の中を力強く生き抜いた先生の姿勢に心を打たれたのである。

そして、森先生の思想は、自分のこれまでの探究成果を全て根底から揺るがせてくれたのだ。私の過去の探究成果が揺らいだというよりも、それはけたたましい音と共に完全に崩れ去ったのだと思う。

森先生は徹頭徹尾一つ一つの言葉を大切にし、一つ一つの言葉の意味を長きにわたって思索し続けておられた。特に、「経験」や「感覚」という少数の概念を自らの経験と感覚を通じて何十年にもわたって思索し続けておられたのだ。

森先生の生き様と探究姿勢を見て、自分を捕まえて離さない幾つかの概念に対して、何年かかっても良いのでそれらの意味を突き詰めていきたいと思うに至った。そして、そうした過程において、それらの概念が自分にとって意味することの変容と成熟を見たいという気持ちもあることを隠せない。

やはりいくら学んでも分からないのだ。「成長」「発達」「変容」というものの正体が全く分からないのだ。これらの概念について探究を進めれば進めるほど、それらは全く新しい姿で自分の前に姿を表す。

確かに人は内面的な成熟を経ることによって、これまでとは違った意味を対象から汲み取ることができるようになる。しかし、問題はそこにはない。問題は、内面的な成長がもたらす意味の変容のみならず、意味と密接不可分なイメージと感覚の変容であって、その変容がその人自身と取り巻く他者に与える作用にある。

また新しい探究課題が見つかったような気がした。正直なところ、人間の成長や発達に関するそうした探究課題に対してなぜ自分がこれほどまでに執着するのか、自分でも判然としていない。「成長」「発達」「変容」という言葉を絶えず頭で理解しようとする自分があるし、それらの言葉を自分の

---

内側に流し込み、感覚や経験を通じて何とかそれらの本質の欠片でも掴んでやろうとする自分がいるのだ。

結局、自分はこのプロセスの中で、このプロセスを通じて生きることしかできないのだと思う。それが探究者としての自分の生き方なのだ。

最後に、森先生の思想には、下手をすると近寄ってはならぬ妖気のようなものが立ち込めているのを強く感じる。そこに近寄るともはや二度戻っては来れないような世界が広大に展開されている、そんな気がするのだ。

私はそれでもその世界に入っていこうという決意をした。今後、自分の精神がどのような末路に行き着くのか定かではない。それでもその世界に足を踏み入れなければならない何かを自分の内側で感じているのだ。

そして、その感覚は内側に留まらず、もう外に溢れ出している。日本の夏はもうすぐそばだ。

**【追記】**:この記事を編集している時点において、渡欧まで後5日ほどである。発達科学に関する専門書と論文に加え、森先生の『バビロンの流れのほとりにて』を必ず行きのフライトに持ち込もうと思う。成田空港を出発した瞬間から、思考を日本語空間から英語空間に移行させようと思うが、それでも森先生のこの本だけは行きの機内で読みたいと思う。

## 215. 発達段階ごとの支援手法について

現在、日々の様々な仕事と並行して、昨年から今年の5月にかけて提供させていただいていた「オンライン発達理論ゼミナール」の受講生とのやり取りを振り返っている。Adobe Connectを活用したオンラインクラスのみならず、フェイスブック上で特別のグループを形成し、そこで受講生と意見交換や情報交換を行っていた。

私自身も受講生の皆さんとのやり取りから多くのことを学ばせていただいたと思っている。振り返る内容は多々あるが、今回の記事は、発達段階ごとの支援手法について詳細に記述されたマーク・フォーマンの“A guide to integral psychotherapy”という書籍を紹介したい。

---

人間の成長・発達を支援する際に、切り口を二つに大別すると、「コーチング的なアプローチ」と「セラピー的なアプローチ」に分けることができるだろう。両者はどちらも人間の成長・発達を支援することに主眼が置かれている。

私自身、サイコセラピストの資格を持っていないので、クライアントの心の闇(シャドー領域)に直接的に介入することを控えている。ただし、心の中で湧き上がる葛藤を抑圧したり、トラウマを解放させずに抱え続けていると、意識が成長・発達するための精神的エネルギーが葛藤などの抑圧に注がれてしまうため、成長や発達が止まってしまうことが多々あるのは事実である。

このことを鑑みたとき、発達支援に携わるコーチでも、サイコセラピーに関するある程度の知識が必要だと感じている。先日、ある研究会で取り上げられたテーマはコーチングであり、そこでもコーチが臨床心理に関する理解をある程度持つておくべきだという議論になった。

コーチングというのは紛れもなく、クライアントの心に介入する支援手法であるため、コーチが人間の心に関する知識を体系的に習得しておくことは必須だと思う。しかし、コーチは人間の心に関する知識が圧倒的に不足しているという声を多方面からよく耳にするし、世界を見渡してみても、サイコセラピストを養成するプロフェッショナルスクールは無数にあるが、コーチを養成するプロフェッショナルスクールは皆無に等しい。

ここで述べているプロフェッショナルスクールというのは、修士号以上を付与する権威を持った大学院のことを指している。コーチングに関して修士号を取得することができるのは、欧州を代表するビジネススクールのINSEADを含め、数えるほどしかないだろう。

それくらいコーチングというのは、プロフェッショナルサービスとしての地位をまだ確立できてないのではないかと思わされる。確固たる地位が確立されていないため、人間の心を扱っておきながらも、心について無知なコーチが世の中に溢れかえってしまっているのではないかと思う。医師国家試験を通過していない者が人体にメスを入れるのと同じくらい、コーチングを取り巻くこうした状況は非常に危険なことだと思う。

そこで、人間の心に関する理解を深め、コーチングに発達理論を適用する際に参考となる書籍を紹介したいと思った。私がJFK大学に在籍していたときにお世話になっていたマーク・フォーマン教

---

---

授が執筆した著書“A guide to integral psychotherapy”は、ロバート・キーガンが提唱した発達段階5を超えて、段階6までの特徴を丁寧に解説し、発達段階に応じた介入手法やその論理が実に明瞭に記述されている。

この本は元来、サイコセラピーに発達理論を適用したものなのであるが、コーチングに発達理論を活用する上でも多大な示唆を与えてくれる。

いくら健全な心を持っている人でも、癒されることなく放置されたトラウマや心の闇があるものだ。全人格的・包括的な発達を射程に入れた時、サイコセラピーの枠組みはコーチングにおいて必須のものだと思う。人間の心に関する洞察を深め、多様な発達段階の特徴を知り、発達プロセスに応じたクライアントとの関わり方を考察する上で、本書は価値ある一冊だと思う。

## 216. 未だ名もなき大切なもの

—ものを名づけるという行為は、創世記にあるように、ものを存在させることである—辻邦生

今日街中を歩いている最中、自分にとって懐かしい曲が耳に飛び込んできた。その曲は私の足を止めた。足が止まった瞬間に、背筋から頭蓋骨のてっぺんに向けて駆け抜ける何かが走った。

一瞬の出来事であったが、その曲が流行していた時代にひとつ飛びにタイムスリップした感覚とともに、当時の記憶の凝縮体のようなものが自分にぶつかってきた。その凝縮体との出会いの直後、私は懐古的な思いと自分の行く末に対する形容しがたい思いが混じり合った感覚の中にいた。

先日、ある知人の方とカフェで話をしているときにふと、「加藤さんにとって大切なものは何でしょうか？」という問いをいただいた。その場において、あまりにも重みのあるこの問いに対して躊躇し、明確な回答を出すことができなかった。

「大切なもの」と聞いた時、世間一般で例示される諸々の「大切なもの」と呼ばれる群像をかき分け、それに捕らわれることなく自分が思う大切なものへと一直線に進むことは相当難しかった。

---

昨夜、就寝前に書物を読むという自分の中で設定している禁忌を破ってしまった。案の定、思考の渦に飲み込まれ、深く夢見の意識状態に入ることができず、今朝の心身の状態は優れていなかった。

しかし、禁忌を破りながら書物を読む中で、「自分にとって大切なものは、自分の内側の世界と外側の世界にある未だ名もなきものなのかもしれない」と思い立ち、即座にメモを書き残していた。直近の米国での4年間の生活と昨年1年間の日本での生活を通じて、これまでは全くもって名付けることのできなかつたものたちが、自分の内面世界に次々とやって来る事態を目の当たりにし、これは一体全体何なのかを不思議に思っていた。

名をつけることは、そのものを言葉によって切り取り、固定してしまうことにつながるのかもしれない。しかしながら、名を得たそのものたちは、同時にこの世界で居場所を獲得し、様々なことを私たちに教えてくれる。

名もなき訪問者に名前をつけることは、その訪問者を間違いなく自分の世界に引き入れることになるため、確かに慎重にならざるをえない。だが、これまでの自分の人生を振り返ってみると、数多くの名もなき訪問者が一回限りの出会いとして自分の元へ訪ねて来てくれたにもかかわらず、それらを自分はことごとく見殺しにしていたことに気づかされた。

あくまでも一人の探究者として大切に思っているもの、大切にすべきものがあるとしたら、それは名もなき訪問者を受け入れ、名前をつけさせていただくことにあるのかもしれない。

名もなき訪問者とは、まさに自分の内側の世界からやって来る未知なるものであるし、自分の外側の世界からやって来る未知なるものである。

今日もたくさんの名もなき訪問者が自分のもとを訪れ、未だ訪れぬ名もなきものたちが自己の内側と外側にある、という確信の中に自分なりの生きる意味が潜んでいるような気がするのだ。

## 217. 能力の発達に関する「5つの変容原則」

---

元ハーバード大学教育大学院教授カート・フィッシャーは、“A Theory of Cognitive Development: The Control and Construction of Hierarchies of Skills (1980)”の論文の中で、能力の発達に関する5つの変容原則を紹介している。私自身、この論文をこれまで何度も読んできたが、これらの5つの変容原則についてそれほど注意を払ってこなかったことに気づかされた。

改めてこれらの変容原則を細かく見てみると、能力の発達プロセスを理解する際に自分にとって盲点となっていた箇所気づく。そもそも、これらの5つの変容原則は、ある能力が次のレベルにどのように到達するかを説明するものである。

それゆえに、これらの原則は、能力の発達過程を予想する核となるメカニズムであると言える。能力の発達過程を説明する原則は、これまで様々な研究者によってその必要性が認識されていた。さらに、これらの原則は、学習や問題解決における行動変化を説明する際にも活用されてきたという背景がある。

興味深いことに、すでに幾つかの実証研究によってこれらの変容原則が検証されており、変容原則に基づいた発達予測が行なわれている。今後、発達予測についても言及していきたいと思っているが、まずは5つの原則を押さえることが先決である。

結論から先に述べると、5つの原則はそれぞれ(1)統合化(intercoordination)、(2)複合化(compounding)、(3)焦点化(focusing)、(4)代用化(置換化:substitution)、(5)差異化(differentiation)と呼ばれる。統合化(intercoordination)と複合化(compounding)はともに、既存の能力が組み合わせたり、新しい能力レベルがどのように生み出されるかを説明する。

より具体的には、「統合化(intercoordination)」は既存のレベルから新たなレベルへの発達の際(マクロな発達)に適用される原則である。一方、「複合化(compounding)」は、既存のレベル内における能力が組み合わせる際(ミクロな発達)に発揮される原則である。

要するに、統合化(intercoordination)はある能力レベルから次のレベルに移行するという「垂直的な発達」に際して見られる現象であり、複合化(compounding)は同一能力レベル内における量的拡大という「水平的な発達」に際して見られる現象である。



---

次に、「焦点化(focusing)」と「代用化(substitution)」は、複合化よりも細かな発達プロセスにおいて適用される原則である。焦点化(focusing)は、あるタスクをこなすために必要となる能力を即座に選び抜くことを可能にする。一方、代用化(substitution)は、ある能力を一般化させて他のタスクに対して活用する、あるいは他の文脈内で活用する際に発揮される。

最後の変容原則である「差異化(differentiation)」は、ある能力がより細かな能力に細分化される際に発揮される。ある能力が分化し、それらの構成要素がそれぞれ高いレベルで発揮されるようになると、それらが再び統合化され、次のレベルに至るという発達の根本原理は馴染みがあるだろう。

その根本原理の出発点はまさに差異化なのである。つまり、差異化がなければ統合化もありえず、能力の発達は起こりえないということである。差異化、代用化、焦点化、複合化というミクロな発達が積み重なることによって最終的には統合化というマクロな発達が生み出されることになる。

フィッシャーも指摘しているが、これら5つの変容原則はおそらく完全なものではなく、さらなる実証研究によって洗練化される必要があると思う。洗練化が実現すれば、より正確な発達予測が可能になると見込まれる。

ここで追加として、能力の発達に不可欠な二つの主要因を見ていきたい。ある能力が新たなレベルに到達するためには、常に「有機体要因」と「環境要因」が不可欠となる。それら二つの要因について、今から簡単に見ていきたい。

まずは有機体要因に関して、それは二つに分けることができる。一つ目は、私たちは発達の対象となる能力をそもそも持つておかなければならないということである。これは言うまでもないかもしれないが、能力が次のレベルに到達するためには、基礎的な土台となる能力が存在しておかなければならないということだ。つまり、「無から有は生まれない」という言葉は能力の発達にも当てはまる。

二つ目は、それらの能力の発達に対して上記の変容原則が適用できなければならない。例えば、もし私たちがある能力を持つており、その能力がすでに最高レベルに達している場合、その能力に変容原則を適用することはできず、能力の発達はそれ以上起こらないのだ。

---

有機体要因と同様に、環境要因にも少なくとも二つの種類が存在する。一つ目は、ある能力が発達を遂げた場合、新しいレベルの能力が機能する環境が整っていないなければならない。つまり、いくら高度な能力が獲得されたからといって、それが発揮できないような環境であれば、能力の発達は起こらないということである。

二つ目は、複数の能力が発揮されることが要求され、それらの能力が組み合わさって初めて状況に対応できるような環境が必要となる。要するに、既存の能力をあれこれ組み合わせながらでないと解決できないような課題や状況がなければ、より高度な能力が獲得されることはないということである。

能力の発達には、有機体要因と環境要因の双方が必要とされることをもう一度強調しておきたい。なぜなら、個人の発達を支援する際に、とかく個人にだけ焦点を当てがちであるが、発達が醸成される環境設定やタスク設定が重要であるということを忘れがちであるからだ。

有機体要因と環境要因のどちらか一方しか備わっていない場合、能力の発達は起こらないということ肝に銘じておきたい。

統合化(intercoordination)と複合化(compounding)という二つの変容原則は、どちらも複数の能力が結びつき、より複雑高度な能力が生み出されることに関係している。能力の発達プロセスに関する先行研究やピアジェ派の文献においても、複数の能力が結びついて一つの新しい質的に異なった能力になることが指摘されているように、統合化と複合化の考え方は能力の発達を理解する際に特に重要になる。

次回以降の記事では、今回紹介した5つの変容原則のそれぞれを詳しく見ていきたい。

## 218. 成長・発達に不可欠な権威的存在

先日、クライアントとのセッションの中で、一つ興味深い論点が浮上した。「父性」あるいは「力強さ」と呼ばれるものの大切さについて話題となったのだ。

---

拙書『なぜ部下とうまくいかないのか:「自他変革」の発達心理学』を読んで誤解を与えてしまっていたのであれば申し訳ないのであるが、段階5を体得した人物は、決していい人でも優しい人でもない。確かに、段階5の人たちは独特な包容力や柔軟性を持っているため、それが「いい人」や「優しい人」という印象を与えてしまうのは理解できる。

しかし、段階5の人たちは、包容力や柔軟性の奥底に、ある種の「力強さ」を兼ね備えているのだ。この力強さゆえに、段階5の人は腑抜けた包容力や柔軟性ではなく、肝の据わった包容力や柔軟性を持つことができる。

段階4の人たちは、必死に己の刀を磨くことに心血を注ぎ、鞘から刀を抜いた状態で常に日々を生きている。一方、段階5の人たちは、錬磨された刀を鞘にしまいながらも、重要な局面においては慈愛に満ちた一太刀を振るうことができるのだ。

慈愛に溢れた一撃を放つことができる段階に到達する際に、自らの中に健全な父性を涵養することが一つ重要になると思った。それは往々にして、自らの中にある大切なものや譲れないものから育まれるものだと思う。

己の内側にある大切なものや譲れないものを発見・涵養する際に、健全な父性を携えた人物の存在が鍵を握るのではないだろうか。父性の象徴はまさに父親であるため、その人物が自分の父親であることが一番望ましいことかもしれない。

林道義氏は『父性の復権』の中で、『「友達のような父親」は実は父ではない。父とは子供に文化を伝える者である。自分が真に価値のあると思った文化を教え込むのが父の最も大切な役割である』と述べているが、発達理論の観点からもこれは非常に重要な指摘だと思う。

人間の成長・発達には、必ず何かを乗り越える形で成し遂げられる。それゆえに、私たちの成長・発達には、乗り越えていくべき対象物が常に必要とされる。つまり、模範や規範を示す健全な権威は、成長・発達にとって不可欠な存在なのだ。

---

より普遍的な価値や深さを希求する純粋な心の動きに忠実になる時、それらをすでに体現している権威に師事しようとするのは当然の流れではないか。権威に師事し、その権威を乗り越えていくこと。それが成長・発達の否定できぬ姿なのだ。

自分にとっての権威的な存在は、何も生きている人物に限られるわけではなく、過去の偉大な人物でもいいだろう。とにかく自分よりも普遍的な価値や深みを体得した人物に師事することが重要となる。そうした人物がいなければ、乗り越えるべき対象もなく、進むべき方向性も得られぬことになるだろう。

親が権威を持ち、子供の上に位置しているからこそ、子供は親を乗り越える形で自立の道を歩もうとする。健全な権威としての親がいなければ、子供は成長・発達の道すがら途方に暮れてしまうだろう。

成長・発達の探究者としての私にとって権威とは、ジェームズ・マーク・ボールドウィンやジャン・ピアジェのような過去の偉大な発達論者たちであり、ロバート・キーガンやオットー・ラスキー、そしてカート・フィッシャーなどは現存する権威たちである。

これから留学をするオランダのフローニンゲン大学でも新たな権威に師事し、そこから新しく何かを学び取っていくことになるだろう。「師匠越え」は、師に対する最良の恩返しである。

私はこれから何人の師匠に対して最良の恩返しをすることができるだろうか。

## 219. 母校の思い出と大月康弘先生

—世界を識ることは己を知る途でもある—大月康弘

変わることはない景色が、ある日突如として別の姿を露わにする瞬間に立ち会ったことはないだろうか？4年間通った母校を久しぶりに訪れた時、あの時と変わらない佇まいの兼松講堂や時計台は、もはや当時とは質的に異なる何かを発しているように感じられた。

---

変わらないはずの建築物が違った様相を私に与えているということに気づいた時、卒業後のこの7年間という期間の中で、確かに自分の内側で変容が起こっていたのだと了解した。「人は内面の成熟に応じて、世界から異なった意味を汲み取り、世界に対して異なった意味を付与する」というのは、構造的発達心理学の根幹にある考え方であるが、まさにそれを実感するような経験であった。

この場所には私の記憶が紐付いている。この場所には自己の履歴が刻印されている。そんなことを思った。

10年前のある夏の日、本学の先輩でもある父と共にキャンパスを散歩したことを今でも鮮明に覚えている。父は当時の母校の様子を、私は現在の母校の様子を語り、親子で汗だくになりながらも清々しい思いと共に母校を歩いたあの夏の日を、私は決して忘れることはないだろう。

場所というのは、私たち人間と切っても切れない関係にあるのだ。場所は人間存在と密接不可分であり、人間存在の履歴でもある、そんなことを思った。

渡欧することが正式に決まった時、私の中で「ヨーロッパ」なる掴みどころのないものが眼前に立ち現われた。正直なところ、私にとってヨーロッパという存在は、私の探究領域である「人間の意識」以上に得体の知れないものであった。

「ヨーロッパ」という言葉に思いを巡らせた時、ビザンツ帝国を中心とした前近代ヨーロッパ経済社会構造分析をご専門とされている大月康弘先生のお名前が瞬間的に脳裏に浮かんだ。商学部在学中の当時、私は経済学部の授業も多く履修しており、大月先生の「経済史」の授業を履修させていただいていた。

その時の思い出もあり、大月先生のお名前が浮かんだ瞬間に、自分なりに「ヨーロッパ」という途方もない存在と向き合うため・咀嚼するために先生の研究に活路を求めたのだ。その時に偶然見つけたのが、まさに私のオランダ行きが確定したのと同時期に出版された先生のご著書『ヨーロッパ時空の交差点』であった。

---

ご著書を拝読させていただいた後、私は先生とお会いしたいと思い、先生に連絡を差し上げようとしていた。しかしながら、先生のゼミ生でもなく、単に先生の授業を履修していた一生徒が突然連絡をするのはいかなるものかと躊躇し、結局連絡することを諦めていた。

そうした状況の中、オランダのフローニンゲン大学から母校の卒業証明書と成績証明書の原本を郵送するように連絡があった。メールで母校に依頼することもできたが、一時間弱の散歩を兼ねて母校に直接足を運ぶことにした。

そこで偶然が起こった。母校の西キャンパスの門をくぐった左手にある掲示板にふと視線を向けると、「一橋大学附属図書館ブックトーク2016:ヨーロッパ 時空の交差点―場所に学ぶ、書物に学ぶ、その作法―」というチラシが目飛び込んできたのだ。

私は言葉を失いながらも、心の中で「なんという偶然だろうか・・・」という言葉が発していた。この機会を逃してはならないという強い思いから、間髪入れずにこのイベントの参加申し込みをした。

イベント当日の小雨の降る天候とは裏腹に、私の心は晴天であった。「8年振りに大月先生のレクチャーを拝聴することができる」というその事実だけで心はすでに満たされていたと言える。

当日のレクチャーの中で、先生が「時間の三層構造」に言及された時、私は自分の研究領域と重ね合わせながら「発達の三層構造」に思いを馳せていた。また、先生が「ギリシャにあるアギア・トリアダ修道院では、ロゴス(論理)を極めようとした人間たちが、ロゴスでは到達できない神の世界に参入するために観想的な生活を送っていた」というお話をされた時、合理的な知性を発揮することが要求されていた国際税務コンサルティングという最初のキャリアから、禅的修行とヨガの道を包摂した意識の形而上学の探究にキャリアを転換させた自分とが重なった。

そして、レクチャーのPPTの最後のスライドが現れた時、私は嬉しさと驚きの感情に包まれていた。先生はご著書の中で私が敬愛する辻邦生先生に言及しておられ、イベントの参加申し込みの際の「講師への質問」の欄に、大月先生にとって辻邦生先生の存在とはどういったものなのかについて質問させていただいていた。

---

その最後のスライドには、辻邦生先生(1925-1999)と奥様の辻佐保子先生(1930-2011)のお二人が笑顔を浮かべている写真が掲載されていたのだ。大月先生は、西洋美術史、特にビザンティン美術をご専門とされておられた辻佐保子先生と親交があったそうだ。

米国での4年間の生活を終え、この1年半という時間を日本で過ごした意味は、自分にとって途轍もなく大きなものであったということが、渡欧直前の今となってまざまざと感じる。森有正先生からは「一つ一つの概念を経験と存在をかけて探究し、思索を深めていくこと」の意味を、辻邦生先生からは「愚直なまでに書くという営みを通じて、内側と外側の現象を掴んでいくこと」の意味を、大月先生からは「歴史のうねりと構造を捉え、歴史の源流を辿るような射程の広い探究をし、その成果を現在と架橋させていくこと」の意味を学ばせていただいたのだと思う。

豊富な史実と旅の経験が織り成す先生の文章を再び味読しながら、そのようなことに思いが至ったのだ。

## 220. 生態系(ecosystem)としての知性発達

先日から数回にわたり、発達理論に造詣の深い知人の方と意見交換をさせていただいていた。ロバート・キーガンが提唱した構成的発達心理学(constructive developmental psychology)やピアジェ派や新ピアジェ派の構造的発達心理学(structural developmental psychology)においては、内面の発達や成熟を建築物の高さに見立てるのに対し、自己心理学(self psychology)においては、建築物の堅牢性(その建物の素材の質や強度)に見立てるという両者の関係性に関する質問を最初にいただいた。

言い換えると、構成的発達心理学や構造的発達心理学では建築物の堅牢性に関する言及がほとんど見当たらず、そのあたりに関する情報と建築物の高さと堅牢性の関係性について意見を求められたのだ。

「成熟」という言葉を一つ取ってみても、上記で述べたような二つの異なる意味がある。

構造的発達心理学が扱う「成熟」というのは、まさに建築物の高さに該当するものである。つまり、構造的発達心理学が扱う「垂直的な成長」というのは、建物がより高く建造されていく様子を表してい

---

る。一方、自我心理学や自己心理学が扱う「成熟」という概念は、建築物の堅牢性に該当するものだと思う。それを構造的発達心理学の観点から捉えると、まさに「水平的な成長」のようなイメージである。

そうした両者の関係を考えると、真に全人格的な発達を遂げるためには、堅牢性を確保しながらより高度な建造物を建立させていく必要があると考えている。特に、幼少期の体験がその人の建築物の土台になることは間違いないため、そこが脆弱である場合、高度な建造物が築き上げられることはないだろうし、仮に築き上げられたとしても、いつか土台から必ず崩れ去ってしまうだろう。

ザカリー・スタインも指摘しているように、建物の次の階層を構築するためには、現在の階層をいかに豊かにするか、つまり、その段階における経験を豊富に積んでいくことが不可欠だと思う。私たちが発達段階をひとつ飛びに移行することができないのは、もしかすると創造主の計らいなのかもしれない。

発達段階を飛ばすというのは、現在の発達構造を蔑ろにしてしまうことを意味するため、発達段階を円滑に駆け上がることができないというのは、とても理にかなっている気がするのだ。

また、カート・フィッシャーが知性や能力の発達に「感情」が不可欠であると述べているのも、建築物により高度な階層を加えていくためには、土台となる堅牢性というものが必須となり、それはそもそも人間関係の中で情緒の交換を通して育まれるものである、という考え方がフィッシャーの思想の中にあるのだろう。

こうしたことを考えると、建物の堅牢性を無視して高さのみを追求することは、非常に危険な営みであるばかりか、それはほとんど意味のないことだとも思われる、という意見を伝えさせていただいた。

それに対して、再び鋭いご指摘を受けた。一方が「高さ」に着目するものであり、もう一方が「堅牢性」に着目するものだとすると、ケン・ウィルバーのインテグラル理論が提唱する「発達ライン」という概念は誤解を招く可能性のあるものであり、今回の論点である二種類の成熟をうまく説明するものではないというご指摘であった。



---

さらに、建築家は建物を設計する際に、単に高さに着目するだけでなく、その建築物の堅牢性を確保する建築素材についても真剣に検討するはずであり、カート・フィッシャーの研究や理論は「発達段階が高度な段階に到達するためには、自我はどのような堅牢性を備えておく必要があるのか？」「自我の堅牢性が確保されずに高度な段階に達してしまった場合、どのような負荷が加わると構造の崩壊や退行が生じるのか？」という問いに肉薄するものではないのではないか？というご指摘を受けた。

一点目のご指摘は、インテグラル理論の「ライン」という考え方が内包する隠れた問題を突いている。私たちの知性や能力というのは、各々が独立しながらも相互に関連し合っている。しかし、インテグラル理論が「ライン」という概念を図で説明する際には、複数の知性領域(能力領域)が単に独立したものとして分断されてしまい、それらの相互作用のニュアンスが伝わりにくいという問題を抱えている—ウィルバー自身はこうした相互作用を考慮に入れているのであるが。

また、二つ目のご指摘は、ピアジェ派や新ピアジェ派などの構造的発達心理学が内包している盲点を突いている。構造的発達心理学では、どうしても建物の高さのみに着目しがちであるという限界を持っているのだ。

カート・フィッシャーがある時期から「構造(structure)」という言葉を使うのを避け、感情や環境による変動性を踏まえて「レベル(level)」という言葉を用いるようになったのも、建物の高さというのは固定的ではなく、高さそれ自体が建物の素材や建物を取り巻く環境要因によって変動するということを認識していたからだと思う。

実際に、後年のフィッシャーは、フローニンゲン大学のポール・ヴァン・ギアート(オランダで私が師事をする人物)という研究者のアプローチに影響を受け、そもそも「建物」というメタファーすらも使わないようになっていたのだ。

建築物というのはそもそも、環境的な要因によって形が変わったり、高さが変わったりするものではない(晴れの日には建物が円形状に変化したり、高さが変動することは基本的にはない)。しかし、私たちの意識や心はそうではなく、環境要因によってダイナミックに変動するものである。そこでフィッシャーが採用したのは、ヴァン・ギアートが使っている「生態系(ecosystem)」というメタファーである。

---

このメタファーにおいて、人間の意識そのものが一つの大きな生態系であり、そこに生起する諸々の知性や能力を生物種と捉えているのだ。より拡張させて説明すると、生物種としての能力も一つの生態系として捉えることが可能であり(一つの能力の構成要素として無数のサブスキルが存在するため)、生態系と生物種のフラクタル構造が意識の発達に見られると考えられている。

そのため、このメタファーを使うと、建物の堅牢性に問題があった時に生じる人格障害のような現象は、人格という一つの生態系の病理であり、その病理の原因は、生態系内の何らかの生物種が異常発生していたり、ある生物種が他の生物種を過剰に食い殺していることにある、と説明することができる。

要するに、複雑性科学を発達心理学の領域に活用し始めている「新・新ピアジェ派」では、人間の意識(consciousness)や心(mind)を「建物」として捉えることから脱却し、生態系(ecosystem)として捉える流れになっているのである。

新・新ピアジェ派は、「発達段階が高度な段階に到達するためには、自我はどのような生物種を内側に抱え、それはどのような相互作用をする必要があるのか?」「生態系内の生物がどのような種類と質と量を持ち、どのような相互作用が行われると、生態系が進化、もしくは崩壊するのか?」という質問に答えるような研究を日夜進めているのである。

人間の意識や心、そして知性や能力の性質を考えると、生態系のメタファーの方が建物のメタファーより妥当であると判断し、この領域の探究をより進めていく必要があると私自身判断した。それゆえに、新・新ピアジェ派の巣窟であるフローニンゲン大学に進学することにしたという経緯がある。

生態系という発想も、実はもともとはジャームズ・マーク・ボールドウィンやジャン・ピアジェも持っていたものなのであるが、いつかを境目に「建物」という固定的・静的なメタファーで人間の発達を捉える風潮になってしまい、100年経って再び原点回帰するようにボールドウィンやピアジェのオリジナルな発想に戻って来たとみている。

最後に、その方からご指摘があったが、複雑性科学と発達心理学の横断的探究が主流になりつつある状況を鑑みると、ロバート・キーガンの構成的発達心理学やケン・ウィルバーの発達理論は過

---

去の遺物となりつつあり、知性発達を真に理解しようとするに相当な学習量が要求されるようになってきているのだ。

**【追記】**:201-220の記事を編集し終えて、ここから数年間は—可能であれば死ぬまでの期間において—、自分が読みたい専門書籍と論文を無心になって読み込み、自分が書きたいと思うことをひたすら書く生活に入りたいと思う。読むことと書くことに対するこうした思いと溢れんばかりのエネルギーを、もはや押しとどめておく必要などないのである。自分の感覚とエネルギーを全て解放し、表現活動と創作活動に全身全霊で打ち込みたいと思う。